

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：72601

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2022

課題番号：21K12853

研究課題名（和文）人身供犠の解明 古代オリエント・地中海世界を中心にして

研究課題名（英文）Elucidating Human Sacrifice: Focusing on the Ancient Orient and Mediterranean World

研究代表者

岩崎 大悟 (Iwasaki, Daigo)

（財）古代オリエント博物館・研究部・共同研究員

研究者番号：00770166

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：古代オリエント・地中海世界での人身供犠に関連するとされてた文献および考古学的な発見を検討し、それぞれの地域での特色や他の宗教儀礼との関連を明らかにできた。同時に、これまで同じ「人身供犠」に関するものとして一括りにされることが多かったが、人身供犠とは何であるか、どこまでを人身供犠と呼ぶか、他の祭儀との違いをどのように考えるかがしばしば研究領域および各研究者の見解に依存しており、概念の有効性を吟味・再検討する必要があることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代地中海文明を基盤とする欧米のみならず世界各地の文学作品で「自己犠牲」や「身代わり」は好まれる文学モチーフの一つであり、人身供犠を対象とする本研究の進展は、人類の宗教理解・文学理解に資するところが大きい。

幼児虐待が保護すべき乳幼児を生命の危機に晒すという点で人身供犠の中でも幼児供犠と、自爆テロが宗教的意図を達するために（自身を含む）人命を絶つ点で人身供犠全般と、それぞれ本研究は関わりを有している。もちろん、安易な関連付けや比較は慎重であるべきだが、人身供犠の特質を解明する本研究の進展はこれら現代の課題にとって示唆的である。

研究成果の概要（英文）：This study have examined literary and archaeological findings related to human sacrifice in the ancient Near Eastern and Mediterranean worlds, and have been able to clarify the characteristics of human sacrifice in each region and its relationship with other religious rites.

At the same time, it shows that the validity of the concept needs to be examined and reexamined, as what human sacrifice is, to what extent it is called human sacrifice, and how it differs from other rituals often depend on the field of study and the views of each researcher, although it has often been lumped together as being related to the same "human sacrifice" in the past. We were able to show that the validity of the concept needs to be examined and reexamined.

研究分野：宗教学・宗教史

キーワード：人身供犠 宗教儀礼 古代オリエント 地中海世界

1. 研究開始当初の背景

ポエニ世界における人身供犠 古代オリエント・地中海世界では、他の古代世界と同様に人身供犠に関して、文献での証言や考古学の発掘により発見された遺物が残されている。中でもフェニキア人が入植したカルタゴ(現在のチュニジア)を中心とする地中海中央部の沿岸都市群(ポエニ世界)ではトフェトと呼ばれる幼児用墓地から動物の骨とともに多くの焼かれた乳幼児の遺骨が発見された。このトフェトはフェニキア(現在のレバノンおよびイスラエル国北部の沿岸部)では確認できず、カルタゴの他、サルディニア島などの地中海沿岸部のみに見られる。

このトフェトでの乳幼児の遺骨が死んだ幼児を単に火葬したのか、人口抑制のために幼児の殺害が起きたのか、あるいは、人身供犠のような儀礼的殺害を反映しているのか、について議論されているが、何らかの人身供犠を想定する研究者が少なくない(例えば、橋本英将「捏造された狂気? フェニキアの幼児供儀」天理大学考古学・民俗学研究室編『モノと図像から探る怪異・妖怪の東西』)。

ギリシア・ローマにおける人身供犠 ポエニ世界での状況に関しては、古代ギリシア・ローマの歴史家によって「人身供犠」として言及され、「野蛮」な風習として非難されている(例えば、ポンペイウス・トグロス『ピリッポス史』)。一方、古代ギリシアでは神話や悲劇の中で人身供犠が登場し、例えば「アウリスのイピゲネイア」のように、主人公の男性が未婚の娘を神に捧げる行為は英雄的だと称賛され、しばしば超自然的な方法で救命され、人身供犠は動物供犠への代替がなされている。

供犠の論理としては *do ut des* と言い表される神からの最大の好意を得るためには最大のものを贈らなければならない、というローマ人の価値観では人命という最高の贈り物をする行為は、特に戦争や反乱などの非常時に捧げられることがあったとされる(例えば、プルタルコス「ローマ習俗問答」83)。

歴史家による言及はカルタゴ研究で参照されることが主であり(例えば、橋本 同上) 神話・悲劇での扱いは神話学や西洋古典学で研究され(例えば、J. N. Bremmer, 2002 “Sacrificing a Child in Ancient Greece: The Case of Iphigeneia”)それぞれ個別に論じられており、ギリシアやローマでの人身供犠の文献上の扱いや、人身供犠に対する態度を一貫して扱う研究に乏しかった。

古代イスラエルにおける人身供犠 さらに、古代イスラエルでは、旧約(ヘブライ語)聖書にて人身供犠を短く言及するテキストは約 25 箇所あり、人身供犠が物語の中心となる記事が 3 箇所ある(創世記 22 章 = アブラハム; 士師記 3 章 = エフタ; 列王記下 3 章 = モアブ王メシャ)。人身供犠に関する特異な用語として「モレク」という語が 8 箇所用いられており、この語を用いる箇所を中心に人身供犠について短く言及するテキストでは激しい拒絶や嫌悪・憎悪を示している。他方、人身供犠が物語の中心となる記事では否定的な含意は見られず、むしろ物語の転換点となっている。

古代イスラエルでの人身供犠について、歴史的にどのようなものであったかや実際に行われていたのが検討されることもあった(Heath D. Dewrell, 2017 *Child Sacrifice in Ancient Israel*)。しかし、当該箇所の史的背景を復元しようとするも外部史料の乏しさゆえ、論拠の乏しい点は否めなかった。

また、「モレク」という語についてカルタゴでの碑文での用例の類推から人身供犠の様式とも、カナンの冥界の神名とも考えられてきたが、使用されている前置詞とのコロケーションなど言語学・文献学的検討を行われ、聖書の記述上は神名として使用されていることが明らかにされた(John Day, 1989 *Molech: A God of Human Sacrifice of Old Testament*)。ただ、このモレクに対する祭儀と人身供犠の関連については未だ不明な部分も多い。

宗教学的的研究 上記の各地域での人身供犠研究のように、各地域の人身供犠研究はそれぞれ進展しているものの、古代オリエント・地中海世界全体を見通す視点が求められてきた。宗教学、特に宗教人類学の分野では、牧畜民族と農耕民族が対比的に捉えられ、前者が動物供犠を、後者が人身供犠を行なったと考えられている(例えば、山田仁史, 2015「人身供犠は供犠なのか?」『ピオストリー』23号)。しかし、本研究で扱う各地域のうち、ポエニ世界は海洋交易を生業の中心としており、古代イスラエルは(牧畜を理想化しているが)実態は定住して牧畜と農耕を並行して行なう民族であった。このことから、この地域の人身供犠を検討することは、宗教人類学の上の対比的な説明に新たな視点を加える。

2. 研究の目的

人身供犠は忌避・拒絶される(古代イスラエル = 預言者たち; 古代ギリシア・ローマ = 歴史家たち)一方で、実施され(ポエニ世界、ローマ)、称賛される(古代イスラエル = 人身供犠を実行しようとするアブラハムなど)ことに人身供犠に対する二面的な価値が見て取れる。このような二面的な評価には、人間という最上の存在を供犠にするという態度と、宗教儀礼としての人身供犠が有する「おぞましさ」に対する忌避観を背景とすると考えられる。本研究の核心はそのような人身供犠の背後にひそむ本質への「問い」であり、人身供犠にみる宗教儀礼の残忍性や

人身供犠が有する宗教的特質を解明する。

3．研究の方法

本研究は、本課題に関連する資料収集からはじめた。考古資料としてはポエニ世界でのトフェトおよびレヴァント地方（現在のシリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、パレスチナ）での人身供犠に関連するとされる遺跡についての考古学的研究（発掘報告書、雑誌論文等）を、文献資料としてギリシア・ローマの歴史記述における人身供犠やカルタゴへの言及、ギリシア・ローマの神話・悲劇、旧約聖書を収集した。続いて、収集した考古資料について、人身供犠に関連するとされた経緯やこれまでの研究での学問的議論、当該地域の考古学的研究での位置づけなどについて検討した。また文献資料については使用語彙について他の用例や関連語彙、コロケーションを検討し、（同じ言語や共通セム語、借用語に関する知見を用いて）他の地域の用例との比較を行う、という順で実施した。さらに、本研究で明らかにした古代オリエント・地中海世界での人身供犠に対する諸特徴を、これまでの祭儀、供犠、人身供犠、埋葬儀礼に関する宗教学上の言説と比較し、人身供犠が有する宗教的特質について検討した。

4．研究成果

古代オリエント・地中海世界での人身供犠に関連するとされてた文献および考古学的な発見を検討し、それぞれの地域での特色や他の宗教儀礼との関連を明らかにできた。特に、考古学的な事例では埋葬儀礼や供犠など他の宗教儀礼との密接な関連と差異を示した。

また、文献での人身供犠に関連するとされる事例のについて、用語法の比較を行った。その結果、しばしば同一視される人身供犠でも用語法の面で、供犠とは異なる用語・概念を使用するものから、供犠との著しい共通性を示すものまでさまざまであり、人身供犠には多様な要素が含まれることを示した。

同時に、これまで同じ「人身供犠」に関するものとして一括りにされることが多かったが、人身供犠とは何であるか、どこまでを人身供犠と呼ぶか、他の祭儀との違いをどのように考えるかがしばしば研究領域および各研究者の見解に依存しており、概念の有効性を吟味・再検討する必要があることを示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 岩寄大悟 | 4. 巻 69 |
| 2. 論文標題 人身供犠を描くヘブライ語聖書物語における共通点と特徴 創世記22章、士師記11章、列王記下3章の比較研究 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 神学研究 | 6. 最初と最後の頁 39 - 56 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 岩寄大悟 | 4. 巻 1.5 |
| 2. 論文標題 洪水後のノア 創世記9：18 - 29の文学的機能と現代的課題 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 聖書と物語：上智大学キリスト教文化研究所プロジェクト「ヘブライ語聖書物語テキスト共同研究」論集 | 6. 最初と最後の頁 1 - 30 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 岩寄大悟 |
| 2. 発表標題 救済と身代わりの死 イスラエルのエジプト脱出をめぐる聖書の神話 |
| 3. 学会等名 神話学研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 岩寄大悟 |
| 2. 発表標題 古代地中海世界における人身供犠の検討 文字資料を中心にして |
| 3. 学会等名 日本宗教学会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 岩崎大悟 |
| 2. 発表標題 供犠と流血 「カインとアベル」物語がヘブライ語聖書において有する関テキスト性 |
| 3. 学会等名 上智大学キリスト教文化研究所プロジェクト「ヘブライ語聖書物語テキスト共同研究」 第4回研究会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 岩崎大悟 |
| 2. 発表標題 人身供犠が通過儀礼か モレクの起源と実態をめぐる研究史と課題 |
| 3. 学会等名 日本聖書学研究所 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名 岩崎大悟 |
| 2. 発表標題 ヘブライ語聖書における人身供犠について |
| 3. 学会等名 関西学院大学神学研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 岩崎大悟 |
| 2. 発表標題 人身供犠の再検討 古代地中海・オリエントでの事例を中心に |
| 3. 学会等名 日本宗教学会 |
| 4. 発表年 2022年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|